

第IV章 将来生活の展望



ここまで、職業科に学ぶ高校生の過去の生活と現在の学校生活を、時間の経過順にたどってきた。次に、彼らの描いている将来の生活像を探ってみよう。

言うまでもなく、職業科に学ぶ高校生にとって、主要な卒業後の進路は「就職」である。高校卒業後すぐに就職を選択し、実社会へと入っていく生徒たちは、どのような職業を選択しようとしているのであろうか。また、将来の生活についてどのようなイメージを抱いているのだろうか。

本章では、

1. 進学・就職
2. 仕事・会社の選択
3. 職業生活への期待と不安
4. 家庭生活の設計

という4つの側面から、職業科に学ぶ高校生の描く将来像を明らかにしていこう。

1. 進学と就職

(1) 高校卒業後の進路の予測

高校進学率が90%を大きく超え、該当年齢人口のはほとんどが高校に在学している今、高校時代は、人々の人生設計にとってきわめて重要な分岐点となっている。

ある者は高校卒業後就職して実社会に入り、またある者は4年制大学、短期大学、各種学校・専修学校などの上級学校へと進学する。高校卒業後、すぐに実社会に入るか、あるいはさらに学校教育を受けるか——小学校、中学校における9年間の学校生活の後、高校生がしなければならない第1の、そしてもっとも重要な選択は、この進学か就職かという選択である。進学にせよ就職にせよ、いずれの進路を選択するかは、その後の人生を左右する重大な問題である。そこで、まず、職業科高校生の進学と就職をめぐる進路計画に着目してみよう。

「高校卒業後の進路は、どうなると思うか」と尋ね、高校卒業後の進路を予測させたところ、次のような答えが返ってきた。

就職、家業・家の手伝い	69.3%
各種学校・専修学校	10.6%
短期大学	3.0%
4年制大学	4.7%
その他、未定	11.7%

これらの数字は、あくまでも調査時点における予測であり、そのまま実現するとは限らないが、職業科高校生の大半である約7割の者が就職を予測しており、高校卒業後すぐに実社会へ出ることを選択していると考えてよい。4年制大学や短期大学への進学を予測する者は、それぞれ5%、3%ときわめて少ないが、新しい中等後教育機関として注目を集めている各種学校・専修学校への進学を予測する者が10%を超えている点が目につく。

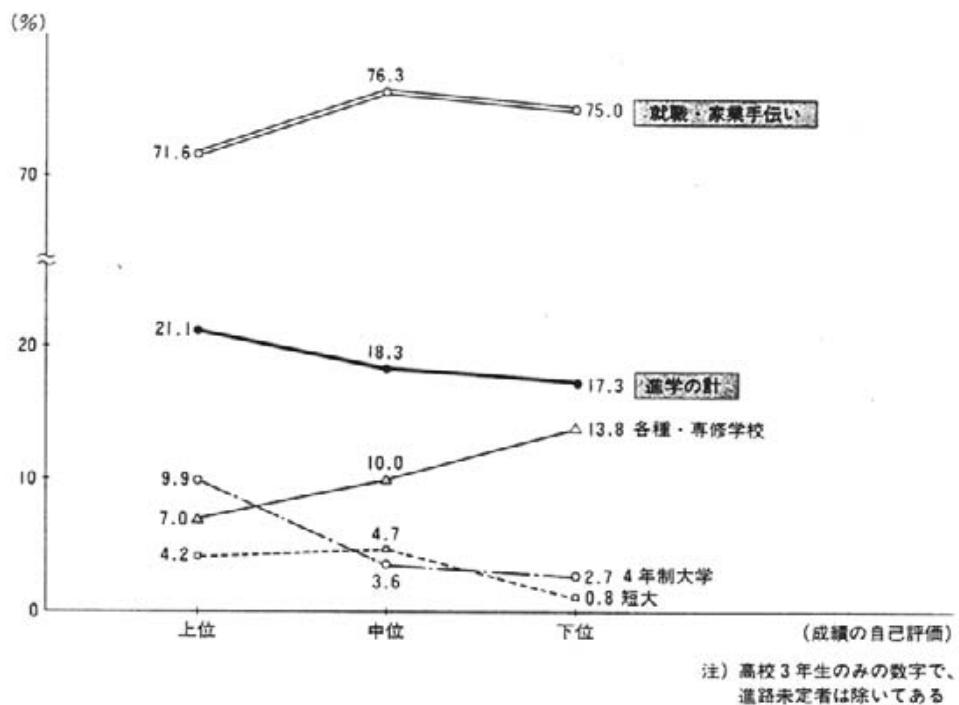
性別に見ると女子に就職を予測する者が多く(男子64%、女子76%)、男子に4年制大学への進学を予測する者が多い(男子8%、女子1%)。また、学年の上昇とともに、進路未定者が減り(1年17%、2年13%、3年6%)、その分、就職を予測する者が増加する傾向が見られる(1年62%、2年71%、3年75%)。

進学か就職かの選択には、高校での成績がものをいい、勉強に自信のある成績上位者のほうが、進学を選択する者が多いと考えられる。卒業までの期間が短く、それだけ進路選択が現実の問題となっている高校3年生だけを取り出して、この関係を見たのが図IV-1である。

図によれば、成績上位者でも72%が就職を予測しており、職業科高校では成績の上下にかかわらず、就職が主要な進路であることがわかる。しかし、各種学校・専修学校、短期大学、4年制大学を合わせた「進学」を予測する者の割合を見ると、わずかではあるが成績上位者ほど高いという結果が出ている(上位21%、中位18%、下位17%)。特に、4年制大学への進学を予測する者については、成績による差が大きく、上位10%、中位4%、下位3%となっている。この意味では勉強に自信のある成績上位者の方が、進学を選択する者が多く、進学か就職かの選択には、職業科高校でも成績がかかわっているということができる。

しかし、各種学校・専修学校への進学を予測する者については、事情が異なる。各種学校・専修学校を選択する者は、成績上位者の中の7%、中位者10%、下位者14%と成績が低いほど増え、成績下位者の数値は上位者の約2倍に達する。同じ進学ではあっても、4年制大学を選択するのは高校での勉強に自信を

図IV-1 高校卒業後の進路の予測と成績の自己評価



持った成績上位者であり、各種学校・専修学校を選ぶのは勉強に自信のない成績下位者である。このことから考えて、職業科高校における進学か就職かの選択は、単に勉強の得意・不得意や、成績の上下だけに基づいてなされているわけではない。特に各種学校・専修学校志望について理解するには、その他の要因（実社会へ出ることを引き延ばそうとする意識や、高校では身につかない専門的技術や資格への期待など）を考慮する必要がありそうである。

(2)高校卒業後の進路予定の変化

それでは、職業科に学ぶ高校生たちの進路計画は、いつ頃から、どのように形成されてきたのだろうか。すでに見たように、高校卒業後就職を選択する者が7割と圧倒的多数を占めている。このような進路選択は、いつ、どのようにして形成されたのだろうか。

われわれは、就職選択者が大多数を占めている職業科高校生の進路選択の過程を考える

ために、極端ではあるが、次の仮説を準備しておいた。

その仮説は名づければ「進学あきらめ=就職」モデルである。学歴社会といわれる今日にあっては、できるだけ高い学歴を得てしかも威信の高い学校を出た方が、何かと有利である。だから、誰もが高学歴を欲し、幼少期から進学競争へと参加する。職業科に学ぶ高校生たちも、かつてはこの学歴取得レースにエントリーしていたランナーであり、高校卒業後には大学へと進学することを夢見ていたのである。しかし、彼らは、学歴取得競争に不幸にも敗れ、進学を断念し、しぶしぶ就職を選択することになった——「進学あきらめ=就職」モデルが考える進路選択の過程は以上のものである。

調査の目的にも記したが、本調査の基本的なねらいは、暗いイメージに包まれた職業科高校生の現実を、とらえ直してみるところにある。にもかかわらず、このような“職業科高校生=進学競争の敗者”観につながる仮説

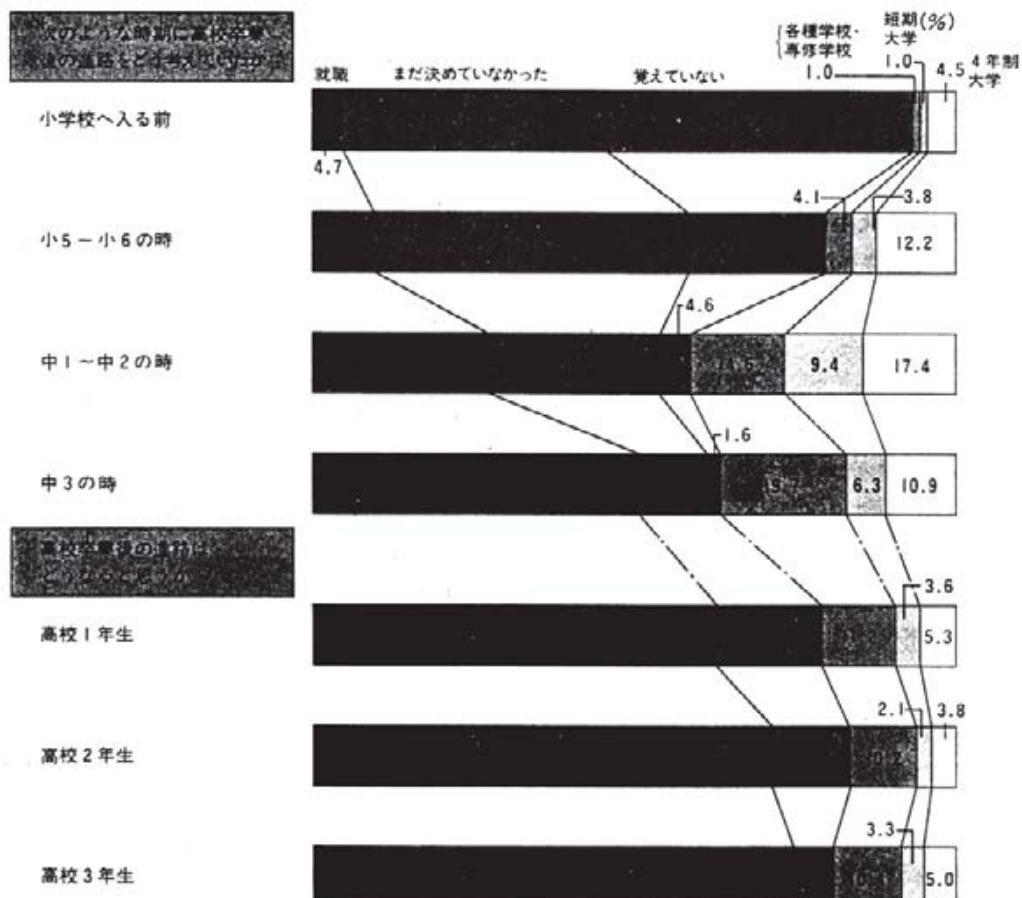
を準備したのは、とりもなおさず、職業科高校生の現実の意識をより明確に際立たせ、世間一般で支配的と思われる“常識”とのズレを露わにしたいという期待からであった。

この問題を考えるために作成したのが図IV-2である。小学校に入る前から中3に至る時期に、職業科に学ぶ高校生がどのように進路計画を変えてきたのか、その過程を示したものである。先の「進学あきらめ=就職」仮説が正しいとすれば、年齢の上昇とともに進学予定が減り、同時に就職予定が増えているはずである。

まず、就職予定者に注目して見ると、確かに、仮説の予想するように、年齢段階が上昇するにつれて就職を予定する者が増え、中3の時には50%の者が就職を予定していたと答

えている。しかし、進学予定に着目してみると、小学校入学前=7%、小5～小6の時=20%、中1～中2の時=41%とこちらも増えつづけている。少なくとも、中学2年生までの間には、進学をあきらめて就職に変えたという過程は見られない。「進学あきらめ=就職」仮説よりも現実にあてはまるのは「進路明確化」モデルである。図IV-2でもっとも特徴的なのは、帯グラフの中央部分、すなわち、「まだ決めていなかった」と「覚えていない」層の大幅な減少である。どちらも、明確には進路予定が思い浮かばなかったという点で進路が未定であったと解釈できるが、中2までの進路計画の変化が示しているのは、この層が減少し、徐々に、進路予定が明確になっていく過程である。したがって、中2の

図IV-2 高校卒業後の進路予定の変化



注) 無回答・不明は省略した

段階までを考えれば、「進学あきらめ=就職」仮説は正しいとは言えず、むしろ、就職へと進路が明確化していくといった方が現実にふさわしい。

ただし、「進学あきらめ=就職」仮説があてはまる可能性のあるのは、中3から高1にかけての高校受験をはさむ時期である。図によれば、中3の時に37%に達していた進学希望が、高校1年生の回答によると20%まで、はじめて減少し、その後あまり変化しない。このことは、高校受験の際、普通科高校を断念し、職業科高校を選ぶことによって、高校卒業後の進学をあきらめた層がある可能性を示している。しかし、とはいえ、そこで進学をあきらめて就職に変えたのは、調査対象者の中の十数%の者にすぎない。「進学あきらめ=就職」仮説のあてはまる可能性のあるのは、彼らだけに限られると見てよさそうである。

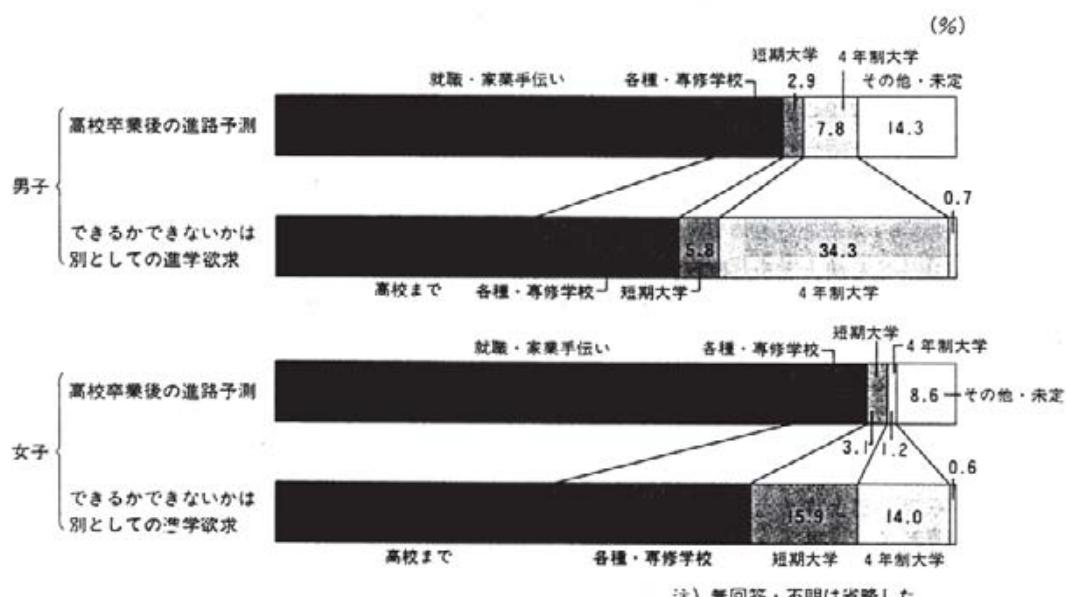
職業科高校生の中で、自分たちの進路を就職と予測する者は約7割と大半を占めている。しかし、彼らの大部分は、学歴取得競争の敗者として進学をあきらめた結果しぶしぶ就職にまわった、というわけではない。職業科に学ぶ高校生の大半は、幼少期から一度も進学することを期待したことがなかったのである。

(3)潜在的な進学への欲求

すでに見たように、職業科に学ぶ高校生の進路選択過程は、大学進学という明確な目標を断念して就職を選択するのではなく、進学か就職かもはっきりとしない混沌とした状態から徐々に就職という目標が定まっていく過程である。確かに、彼らの大半は、小さい頃から、自分が大学へ行くという将来像は持ったことがなかった。そんな彼らが職業科高校へ進学し、いよいよ就職という目的地が見えてきた時、同世代の半数強が、各種学校・専修学校や短期大学、4年制大学に進学していく現実を見てどう考えているのだろうか。高校卒業後、就職して実社会へ入っていくという進路選択の背後に、隠れた(潜在的な)進学への欲求や、「大卒」という学歴・肩書きを取得できない焦りはないものだろうか。

「できるかできないかは別として、どのような学校に進学したいと思うか」という多少意地の悪い質問を行って、潜在的な進学欲求を測った結果が図IV-3である。図は、性別に実際の進路の予測と、潜在的な進学欲求を比べたものであるが、男女ともに「高校まででよい」とする者が約4割にとどまっており、

図IV-3 潜在的な進学欲求



実際には就職を予測している者の割合（約7割）を大きく下回っているのがわかる。自分は高校を卒業したら多分就職するだろうと予測しつつも、その背後には、できたら進学したいという潜在的な進学欲求がはっきりと表れている。

これを実際の進路の予測別に見たのが、図IV-4である。当然のことながら高校卒業後すぐに就職すると予測する者の潜在的な進学欲求がもっとも大きく、就職予測者中の約45%が進学への希望を持っている。内訳は各種学校・専修学校と4年制大学への希望がともに19%、短期大学希望が9%である。

はじめから、各種学校・専修学校、短期大学への進学を予測する者についても、より威信の高い高等教育機関への進学欲求が見られる。双方とも、2割を超える者が、自分が実際に予測している以上の学校への進学を望んでいる。

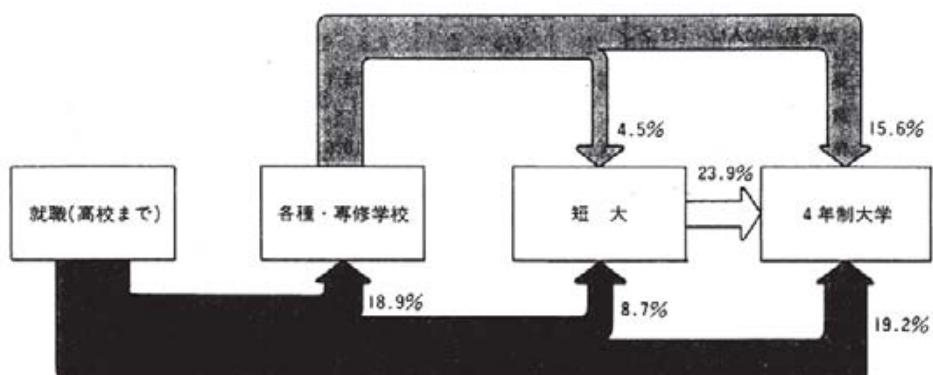
このように、職業科に学ぶ高校生は、かなり根強い進学への欲求を抱きつつも、なお、現実問題としては大多数が、高校卒業後すぐに就職していく将来像を描いている。先に見たように、彼らの多くは、高校生になるまで一度も大学への進学を予測した経験のない者

たちである。だから、潜在的な進学欲求はあっても、それは潜在的なものにすぎず、現実の選択肢にはなりえないのかもしれない。

しかし、潜在的にではあれ、彼らが進学欲求を持っている以上、そこには、進学しないことの焦りや、あるいは、その焦りを抑止し、自らに就職を納得させる彼らなりの論理があるはずである。その点についての彼らの声を聞いた結果が次のものである。

- ①大学は出ていなくとも、本人の努力次第で出世することはできる
「とても・まあ」そう思う……………83.7%
- ②結婚を考えると、4年制大学卒業・短期大学卒業の方が何かと有利な気がする
「あまり・ぜんぜん」そう思わない…74.7%
- ③高校卒業後すぐに就職するよりも、4年制大学へ進学した方が、よい会社に入れる
「あまり・ぜんぜん」そう思わない…61.9%
- ④4年制大学卒業と高校卒業の給料の差は縮まりつつある
「とても・まあ」そう思う……………51.2%
- ⑤4年制大学での勉強は、難しくてついていくのが大変だ
「とても・まあ」そう思う……………61.8%
- ⑥4年制大学では仕事に役立つ技術や知識を

図IV-4 進路予測別の潜在的な進学欲求



- ➡ 就職を予測する者のうち本当は各種・専修、短大、4年制大学へ進学したい者の割合
- ➡ 各種・専修学校を予測する者のうち本当は短大、4年制大学へ進学したい者の割合
- ➡ 短大への進学を予測する者のうち本当は4年制大学へ進学したい者の割合

身につけることはできない

「あまり・せんぜん」そう思わない…65.1%
確かに、大学へ行けば仕事に役立つ技術や知識をある程度身につけることができるかもしれない(⑥)。給料だって、近頃は学歴による差が小さくなっているというけれど(④)、小さくなっているだけで、やっぱり大卒の方がよいだろう。どうもちょっと損な気がしないでもないが、現実問題として、きっと大学での勉強は難しくてついていけない(⑤)。大学なんか行かなくても、がんばれば出世だっ

てできるし(①)、結婚にも特に不利にはならない(②)。それに、たとえ大学に行っても、今就職するよりよい会社へ入れる保証はないっていうからなあ(③)……。

回答結果をながめているうちに、彼らのこんなつぶやきが聞こえてきた。

ともあれ、職業科高校生の約7割は、高校卒業後就職を予測し実社会へと歩み出す。そこで次に、彼らの仕事・会社選択についての考え方を見ることにしよう。

2. 仕事・会社の選択

(1) 将来につきたい仕事

まずは、職業科の高校生が将来どのような仕事につきたいと思っているのか、この問題

から見てみよう。

表IV-1は、工業高校、商業高校、園芸・農業高校の3つの学科別に、生徒が将来どのような仕事につきたいと思っているのか、つ

表IV-1 将来につきたい仕事(学科別)

(%)

工 業 科	商 業 科	園 芸・農 業 科	
①技術職(エンジニア、教員、パイロット、プログラマー、カメラマン、通訳、編集者など)	36.7	①大企業の事務職 24.8 ②中小企業の事務職 20.3 ③栄養士・コックなど 15.1 ④技術職 10.6 ⑤自営・農林漁業 6.8 ⑥専門・管理職 6.5 ⑦中小企業の技能工 1.0 ⑧大企業の技能工 0.9 ⑨その他・不明 14.0	①自営・農林漁業 (うち農林漁業) 21.6 (10.7) ②栄養士・コックなど 20.9 ③技術職 8.7 ④専門・管理職 8.5 ⑤中小企業の事務職 6.7 ⑥大企業の事務職 5.6 ⑦中小企業の技能工 5.3 ⑧大企業の技能工・工具 3.9 ⑨その他・不明 18.8
②大企業(従業員1000人以上の会社・工場)の技能工・工具	17.2		
③自営・農林漁業	8.1		
④中小企業の技能工・工具	7.8		
⑤栄養士・コックなど(栄養士、ケースワーカー、看護婦、保母、デザイナー、理・美容師、ウェイター、コック・板前、スチュワーデスなど)	5.7		
⑥専門・管理職(会社・官公庁の課長以上、議員、駅長、医師、薬剤師、公認会計士など)	4.8		
⑦大企業の事務職	4.4		
⑧中小企業の事務職	2.2		
⑨その他・不明	13.1		

きたいと思う生徒の多い順にまとめたものである。工業科では技術職37%、大企業の技能工・工具17%、中小企業の技能工・工具8%で、工業科と関連の予想される仕事につきたいとする者が62%と、全体の6割強を占めている。商業科でも、これとほぼ同じような傾向が見られる。大企業の事務職25%、中小企業の事務職20%と事務職だけで45%、その他、技術職・自営・農林漁業などのうちで商業科と関連するものも含めると5割以上の者が商業高校と関連の強い仕事につきたいと考えていると言えよう。これに対して、園芸・農業科の高校生がつきたいと思う仕事は多様であり、かつ学科との関連は不明確である。特に、農林漁業につきたいとする生徒は11%しかない。しかしながら、わが国では現在、専業農家の割合はごくわずかしかなく、園芸・農業科の生徒も卒業後は就職しながら家業を手伝うのが普通となっている。また、園芸・農業科高校には、食品化学科など農林漁業よりも栄養士・コックなどの技術職と関連の強

い学科もある。

さて、次に高校卒業後の進路希望と将来つきたいと思う仕事との関連を考えてみよう。表IV-2は、高校卒業後の進路希望別に生徒が将来どのような仕事につきたいと思うかをまとめたものである。この表から、進路希望ごとに、将来つきたいと思う仕事に特徴のあることがわかる。

まず、就職・家の手伝いと答えた生徒たちは多様な仕事につきたいとしている。第1位の大企業の事務職でも17%しかなく、逆に第7位の大企業の技能工・工具でも8%もいる。これは、高校卒業後すぐ就職する生徒たちがつきたいと思う仕事が、すでに見たようにそれぞれの高校の学科と関連が強いためにこのようにバラついた結果になるのである。

次に、各種学校・専修学校への進学を希望する生徒がつきたいと思う仕事について見ると、第1位栄養士・コックなど38%、第2位技術職24%の2つに集中している(合計61%)。こうした仕事は、各種学校・専修学校等で学

表VI-2 高校卒業後の進路希望と将来つきたいと思う仕事

(%)

高校卒業後の進路 将来つきたい仕事	就職・家の 手伝い (3177人)	各種・専修 学校 (486人)	短 大 (138人)	4年制大学 (216人)	その他・未定 (533人)
自営・農林漁業	⑥ 9.2	③ 12.9	① 25.3	③ 10.7	④ 13.7
専門・管理職	⑧ 6.0	⑤ 4.3	⑦ 5.0	② 20.3	⑥ 5.6
技術職	② 14.9	② 23.7	② 21.7	① 34.7	① 26.5
栄養士・コックなど	⑤ 10.6	① 37.7	③ 18.8	⑥ 6.0	② 17.0
大企業の事務職	① 17.2	⑤ 3.7	⑤ 6.5	④ 9.7	⑤ 6.4
中小企業の事務職	③ 14.6	⑦ 2.5	⑥ 5.8	⑧ 1.9	⑦ 5.6
大企業の技能工・工具	⑦ 8.2	⑧ 2.1	⑧ 3.6	⑦ 5.6	⑧ 3.8
中小企業の技能工・工具	⑨ 5.4	⑨ 1.4	⑨ 1.4	⑨ 0.9	⑨ 1.7
その他	④ 12.0	④ 9.4	④ 9.3	⑤ 7.8	③ 14.1

注) ○の中の数字は希望進路ごとの順位

習する必要のあるものであり、この数字は彼らが、各種学校・専修学校への進学と将来つきたい仕事を結びつけて考えていることを示すものと言えよう。

同様なことは、4年制大学進学希望者についても言える。4年制大学進学希望者は、技術職35%、専門・管理職20%と、技術職および専門・管理職につきたいとする者が、全体の55%になっており、これも4年制大学進学と将来つきたいと思う仕事を結びつけていることがわかる。

さて、最後に表IV-3で、成績(自己評価)別に将来つきたい仕事を見てみよう。この表で注目したいのは、成績によって将来つきたいと思う仕事が異なるということである。例えば、成績が上位の生徒で大企業の事務職になりたいと答えた者は17%であるのに対して、成績が下位の生徒でそう答えた者は9%しか

いない。逆に、栄養士・コックなどでは、上位8%、下位15%と成績下位の生徒の方が、そうした仕事につきたいとする割合が多くなっている。

これらの理由として、次のように考えることができるだろう。第1には、成績上位の生徒は、大企業やスペシャリスト・プロフェッショナルなど、一般に一流と考えられており、かつ人気の高い仕事を志望するが、成績下位の生徒は、成績が下位である故に、なりたくてもそうした仕事はあきらめなくてはならないと思っているという考え方である。第2には、成績下位の生徒は、学校でやっていることと似ているに違いない大企業の仕事や、学校を出てからも勉強の必要なスペシャリスト・プロフェッショナルといった仕事はご免だという気持ちがあるのではないかと考えられる。

表IV-3 成績別の将来つきたい仕事

(%)

職業	成績		
	上位	中位	下位
自営・農林漁業	11.8 (8.4)	9.6 (8.3)	11.3 (11.3)
専門・管理職	7.6 (7.4)	6.5 (5.8)	5.6 (7.9)
技術職	21.0 (22.4)	16.9 (18.1)	18.5 (17.8)
栄養士・コックなど	7.6 (6.2)	13.8 (11.1)	15.1 (14.7)
大企業の事務職	17.4 (20.4)	16.2 (18.1)	8.8 (8.1)
中小企業の事務職	11.2 (11.5)	13.0 (15.6)	9.5 (11.2)
大企業の技能工・工員	7.9 (7.5)	7.1 (7.7)	5.8 (6.4)
中小企業の技能工・工員	4.0 (4.0)	3.6 (3.7)	5.1 (7.0)
その他	8.7 (10.4)	11.7 (10.4)	14.8 (13.7)

注) ()内は3年生のみの場合

(2)仕事・会社選択の基準

次に、生徒が仕事や会社を選択する時の基準について考えてみよう。

ここでは、仕事や会社を選択する時の基準を次のような方法で調べた。すなわち、相反するタイプの仕事や会社からなるペアを18ペア作り(P.78:卷末調査票見本²⁹参照)、それについてどちらの仕事や会社の方がよいかを選ばせた。そして、生徒的回答を総合的に判断して、生徒がどのような基準で仕事や会社を選択するのかを考えた。

まず、男女別に仕事・会社選択の基準の特徴をまとめると次のようになる(詳しい数字は卷末集計表参照)。男子は、残業が多いが給料が高い、体を動かすことの多い、責任は重いがやりがいのある、などエネルギーな、あるいはバイタリティにあふれた仕事を選択しているのが特徴である。女子ではそうした選択をしない代わりに、一生勤めることでできる会社よりも給料や労働条件のよい会社、将来性のある会社よりも安定性のある会社、毎月決まった給料をもらう会社など、安定性や労働条件で選択しているのが目立つ。

それでは、学科別・学年別などで見ると、どのような傾向があるだろうか。ここでは林の数量化III類という分析手法を用いて考えてみよう。数量化III類は、回答者のさまざまな反応の中からパターンの似たものを見つけ出し、それらを整理するひとつの「筋」を探ろうとするものである。このようにして見つけ出された「筋」がどのようなものであるのか考えることで、回答者の判断の基準となるものをとらえることができる。そして、こうして得られた生徒の判断の基準を、学科別などで比較してみよう。

なお、今回の分析では性別の差異を考慮して男子生徒と女子生徒を別々に分析した。

(3)女子の職業選択の基準

まず、女子生徒の分析結果から見てみよう。表IV-4は、女子生徒の仕事・会社の選択の

基準の1つめである第1根のカテゴリー・ウェイト表である。第1根のプラス方向を見ると、「人間味に欠けるが大きくて有名な会社」、「自分の意見はあまり生かされないが、大きな会社」、「あまりおもしろくないが給料は高い仕事」などの値が大きい。仕事や会社の内容そのものではなく、仕事や会社をとりまく外的的なもの、具体的には会社の規模、安定性、給料の高さなどを選択の基準としている。そこで第1根のプラス方向を外向志向と名づけよう。

これに対してマイナス方向では、「今は小さいが将来性がある会社」、「大企業ではないが、努力しだいでどんどん出世できる会社」、「自分で新しいことを考えていくことが大切な仕事」、「小さいが自分の意見が生かされる仕事」などの値が大きい。仕事や会社の表面的ではない部分、すなわち、将来性や働きがいといった、仕事や会社の内容そのものを選択の基準としている。そこで、第1根のマイナス方向を内容志向と呼ぶことにしよう。

次に、表IV-5から、第2根について見てみよう。プラス方向では、「人間味に欠けるが大きくて有名な会社」、「大卒社員の多い会社」、「自分で新しいことを考えていくことが大切な仕事」、「出来高によって給料が上がっていく仕事」などバイタリティとチャレンジ精神にあふれた気持ち、何かを達成してやろうという気持ちを大切に選択しようとしているものである。逆にマイナス方向では、「給料は安いが、残業の少ない会社」、「自分の興味と少しはずれるが自宅通勤できる会社」、「言われたことをきちんとこなすことが大切な仕事」、「毎月決まった給料をもらう仕事」など、何かを達成しようという気持ちが見られないものである。そこで、第2根については、プラス方向を達成志向的、マイナス方向を安定志向的選択基準と名づけることにしよう。

職業科の女子生徒が仕事や会社を選ぶ時の2つの基準である(外向志向と内容志向)、(達成志向と安定志向)の2つの軸をそれぞれX軸、Y軸として示すと図IV-5になる。軸の意味に着目しつつ、仕事や会社を選ぶ際の4つの

タイプの判断の仕方について考えてみよう。

(1)安全型

外面志向的で、かつ安定志向的な判断の仕方である。「自分の興味と少しははずれるが自宅通勤できる会社」、「言わされたことをきちんとこなすことが大切な仕事」、「出世はしにくいが大企業」等の条件に見合うところを選ぶ。仕事の内容に不満があるかもしれないが、失敗のないもっとも安全な選び方である。彼女の職業生活は旅に例え

るなら、遠足である。決められた日に決められたコースで有名な観光地を回ってくるというようなものである。

(2)受容型

内容志向的であるが安定志向的でもある。すなわち、内容を重視するのであるがそのために何かに挑戦してやろうとはしない。「小さいが自分の意見が生かされる会社」、「給料は安いが残業の少ない会社」等の会社を選ぶ。内容からくる満足を自分の努力か

表IV-4 女子：第1根カテゴリーウェイト表

女 子	第1根	相関係数	* 3984	数 値
↑ 内 容 志 向 的	1 今は小さいが将来性のある会社			-2.38
	2 大企業ではないが、努力しだいでどんどん出世できる会社			-1.61
	3 自分で新しいことを考えていくことが大切な仕事			-1.47
	4 小さいが自分の意見が生かされる会社			-1.12
	5 地域の名門企業			-0.85
	6 責任は重いがやりがいのある仕事			-0.84
	7 出来高によって給料が上がっていき仕事			-0.80
	8 自宅通勤はできないが自分の興味に合う会社			-0.79
	9 給料は安いが、高校で身についた知識や技術を生かすことができる会社			-0.77
	10 体を動かすことの多い仕事			-0.75
	⋮			
	中 略			
	⋮			
外 面 志 向 的 ↓	27 安定性のある大きな会社			0.87
	28 ちょっとやりがいに欠けるが気楽にできる仕事			0.94
	29 自分の興味と少しはズれるが、自宅通勤できる会社			0.95
	30 出世はしにくいが安定した大企業			0.97
	31 1つの部門を専門的にまかせる会社			1.06
	32 机に向かうことの多い仕事			1.19
	33 高校で身についた知識や技術を生かすことができないが給料が高い会社			1.51
	34 あまりおもしろくないが給料は高い仕事			2.76
	35 自分の意見はあまり生かされないが、大きな会社			2.79
	36 人間味に欠けるが、大きくて有名な会社			3.60

らではなく、会社から与えてもらおうとする。旅に例えるなら、フリー タイム パックツア―というべきもので、目的地では自由に行動するのだが、そこに至るまでは旅行社まかせにしているようなものである。

(3)創造型

内容志向的かつ達成志向的である。「自分で新しいことを考えていくことが大切な仕事」、「今は小さいが将来性のある会社」、「大企業ではないがどんどん出世できる会社」

などを選ぶ。意味のあるものを創造しようとするのである。旅に例えるならば、探険型であり、自分の力で未開地に分け入って行くのである。

(4)獲得型

外面志向的であるが達成志向的でもある。「大卒社員の多い会社」、「あまりおもしろくないが給料の高い会社」、「高校で身につけた知識や技術は生かせないが給料が高い会社」、「残業は多いが給料の高い会社」を

↑
安定志向的
↓
達成志向的

表IV-5 女子：第2根カテゴリーウェイト表

女 子	第2根	相関係数	・3007	数 値
1 人間味に欠けるが、大きくて有名な会社				2.91
2 大卒社員の多い会社				2.17
3 あまりおもしろくないが給料の高い仕事				2.17
4 自分で新しいことを考えていくことが大切な仕事				2.13
5 出来高によって給料が上がっていく仕事				2.01
6 高校で身につけた知識や技術を生かすことはできないが給料が高い会社				1.87
7 残業は多いが、給料の高い会社				1.42
8 自宅通勤はできないが自分の興味に合う会社				1.29
9 全国的に有名な企業				1.15
10 大企業ではないが、努力しだいでどんどん出世できる会社				0.93
:				
中 略				
:				
27 給料は安いがわりとおもしろい仕事				-0.58
28 1つの部門を専門的にまかせる企業				-0.67
29 ちょっとやりがいに欠けるが、気楽にできる仕事				-0.79
30 机に向かうことの多い仕事				-0.95
31 給料は安いが、高校で身につけた知識や技術を生かすことができる会社				-0.96
32 毎月決まった給料をもらう仕事				-0.97
33 言われたことをきちんとこなすことが大切な仕事				-1.15
34 地域の名門企業				-1.41
35 自分の興味と少しはずれるが、自宅通勤できる会社				-1.56
36 給料は安いが、残業の少ない会社				-1.89

選ぶ。バイタリティはあるが、給料などの獲得を目的とする。旅に例えればガイドブック型で、すなわち、自分の力であちこちまわるのだが、それは単にガイドブックに書かれた内容を確認して回っているにすぎないのである。

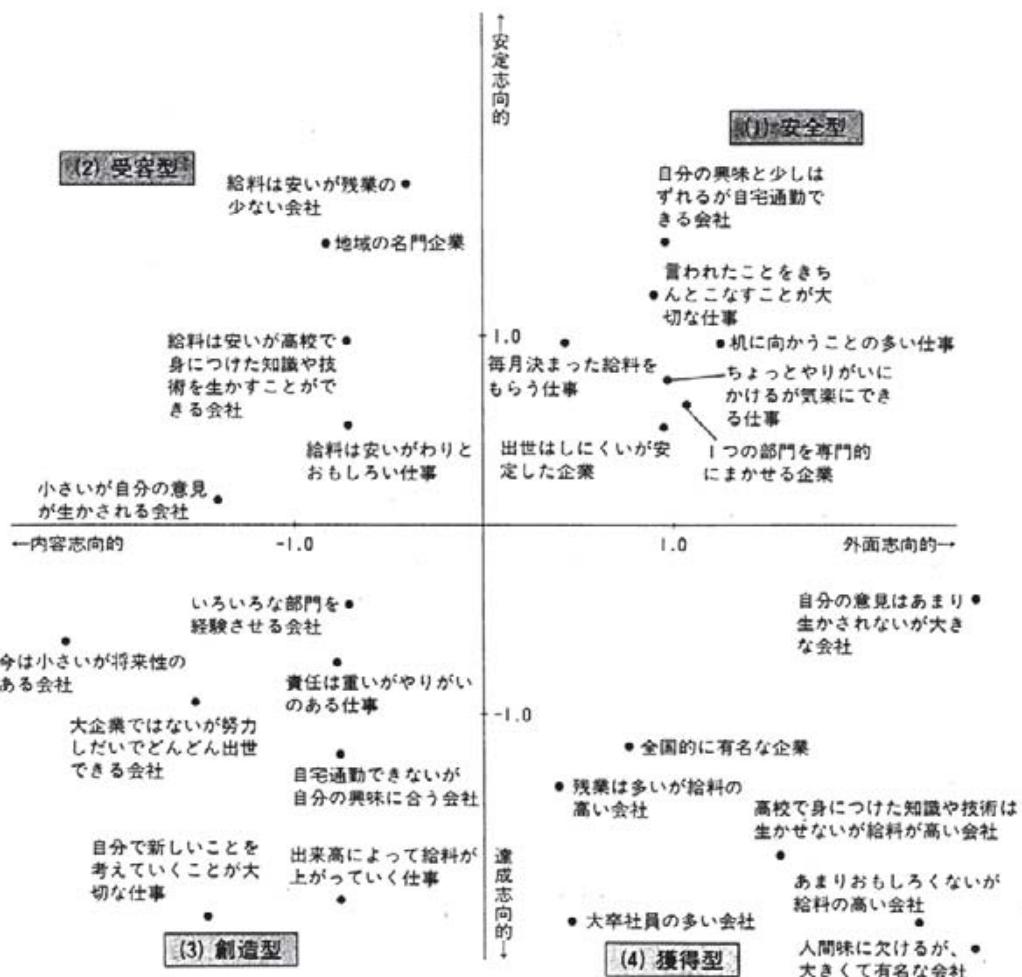
それでは、数量化III類によって得られた女子生徒の仕事や会社選択の2つの基準と、それによって作られた4つのタイプの選択の仕方が、

学科別、学年別、高校卒業後の予定進路等とどのような連関にあるのか見てみよう。

学科別・学年別と仕事・会社選択の基準

まず、学科別・学年別に見てみよう。図IV-6は、学科別×学年別にサンプルスコアの平均点をプロットしたものである。サンプルスコアの平均点とは、あるサンプル（例えば工業科の1年生）がどのような基準で仕事や会社を選択する傾向にあるのか、その平均をとったものである。

図IV-5 女子：仕事・会社選択の4つのタイプ



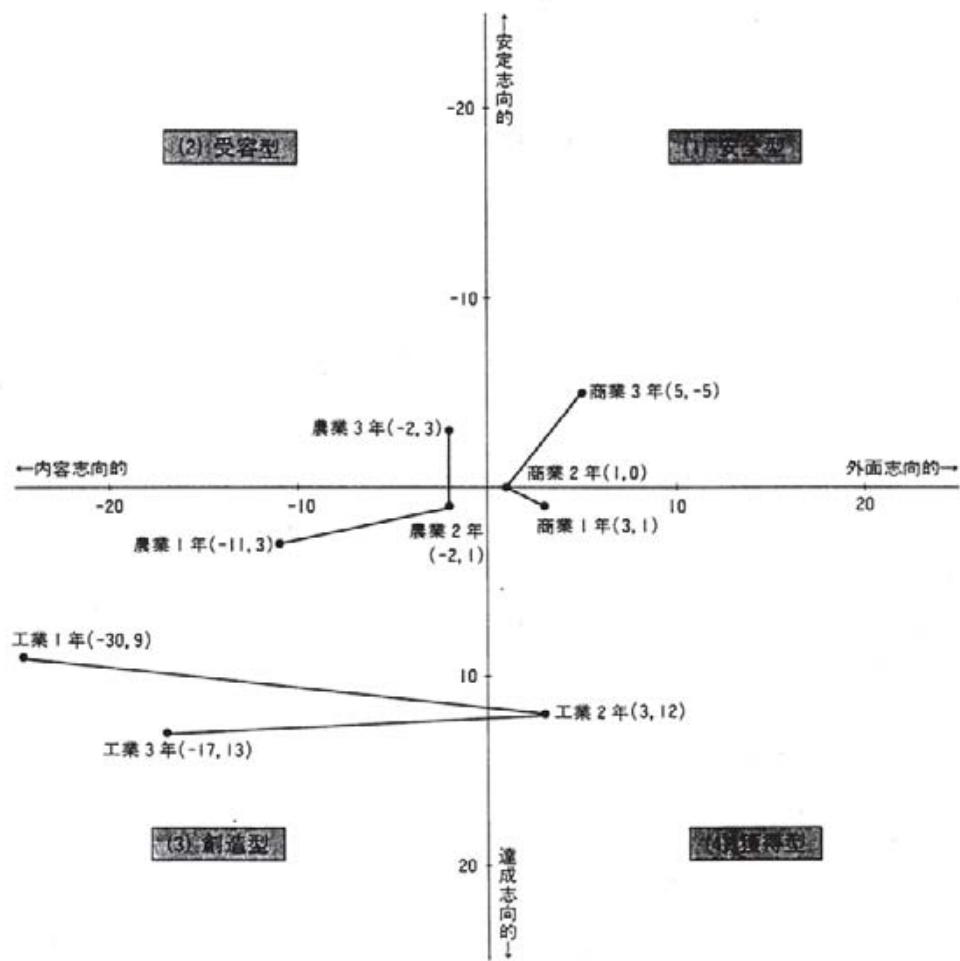
この図で、工業科の女子生徒が他学科の生徒たちよりも達成志向的なことがわかる。そして、同じく工業科で、2年生がやや外面志向的になるが、1年生・3年生ともに非常に内容志向的で、彼女らの仕事や会社を選ぶ基準が創造型であることがわかる。これとは逆が、商業科の生徒である。彼女らは外面志向的に仕事や会社を選び、しかも学年が上がるにつれ安定志向的になっていく。そして3年生では安全型の選び方をするようになる。工

業科と商業科の女子生徒のこうした違いは、おそらく、工業科における女子の地位や工業高校で学習する内容と関連があるものと考えられるが、今回の調査ではそれを明らかにするデータが不十分である。

高校卒業後進路、将来つきたい仕事と仕事・会社選択の基準

進路希望別に見ると、図IV-7にあるとおり、就職・家の手伝いが外面志向的でかつ安定志向的、すなわち安全型であり、その他の

図IV-6 女子：学科別・学年別サンプルスコア平均点



(注) 数字はすべて100倍してある

進路を希望する生徒は、みな内容志向的でかつ達成志向的、すなわち創造型である。

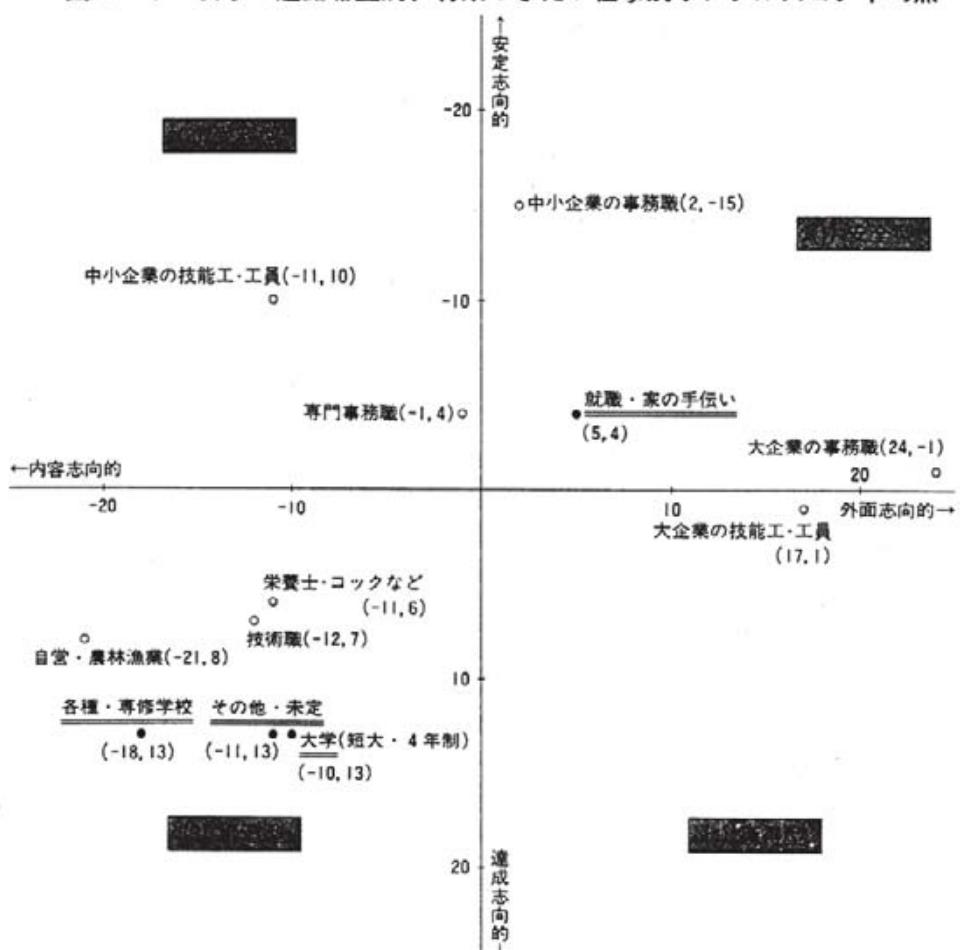
次に、将来つきたい仕事、仕事・会社の選択の基準や、タイプについて見ると、中小企業の技能工を希望する者が受容型に、自営・農林漁業、技術職、栄養士・コックなどを希望する者が創造型になっている。

大企業の事務職と中小企業の事務職を希望する者とはともに安全型の選択をする可能性が高いのであるが、図にあるように、大企業

の事務職は外面志向が非常に強く、また、中小企業の事務職は安定志向が非常に強くなっている。

大企業の技能工についても、獲得型の選択の結果と読みとれるが、これもやはり、外面志向的な選択をした結果と考えることができよう。なお、大企業の事務職につきたいと考えるか、それとも技能工・工員になりたいと思うかは、すでに触れてきたように高校の学科との関係（あるいはそもそもその学科に入

図IV-7 女子：進路希望別、将来つきたい仕事別サンプルスコア平均点



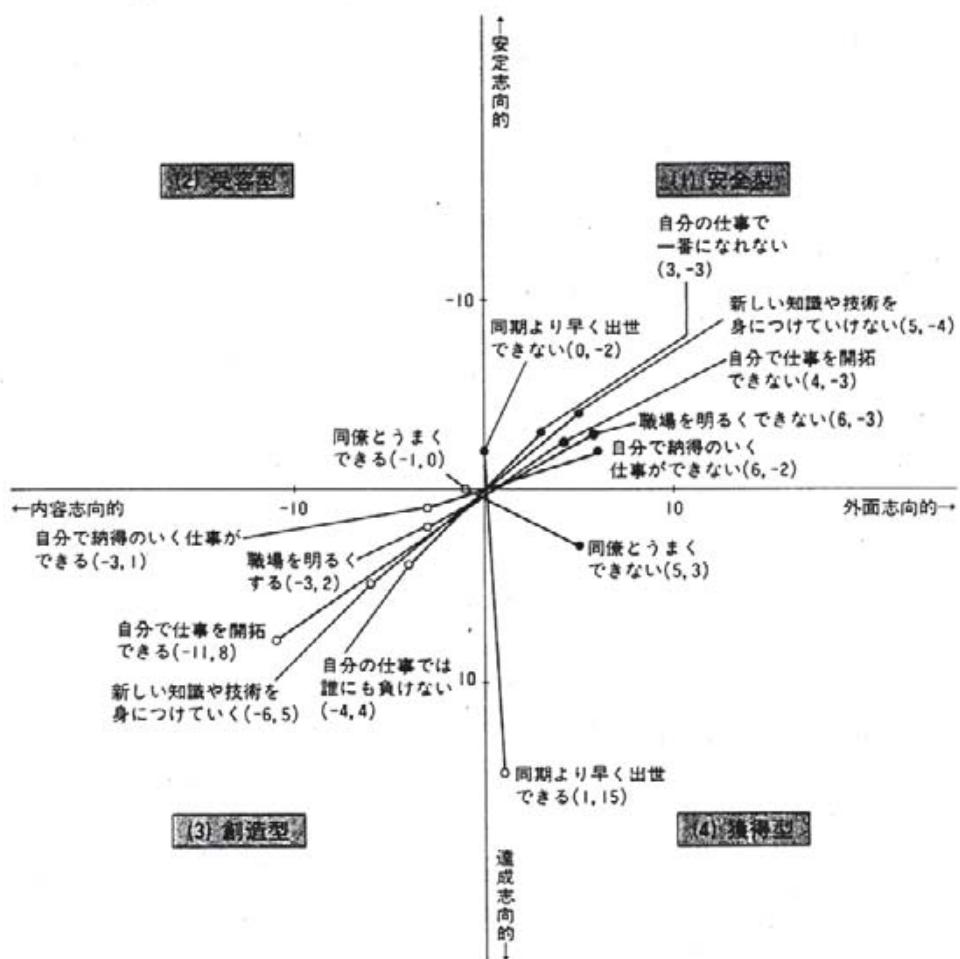
った理由)からとらえることができよう。
職業についての自信と仕事・会社選択の基準

次に、少し視点を変えて、どのようなタイプの生徒がどのような基準で仕事や会社を選択しようとするのか考えてみよう。

図IV-8は、職業生活を行っていく上でのいろいろなことに対する自信の有無と仕事や会社を選択する際の基準の関係を見たものである。これを見ると、それぞれに対して自信があると答えた者が、おおむね創造型の選択

をし、自信がないと答えた者が、安全型の選択をしていることがわかる。すなわち、自信の裏づけがある生徒は内容志向的であり、かつ達成志向的な選択をしており、また、裏づけのない生徒は外面志向的であり、かつ安定志向的な選択をしている。今後、学校教育の中で、生徒たちに職業生活についての自信を持たせるような指導がなされることが望まれる。

図IV-8 女子: 職業についての自信別サンプルスコア平均点



(注) 数字はすべて100倍してある

(4) 男子の職業選択の基準

さて、以上女子について見てきたが、次に男子生徒について見てみよう。

表IV-6、表IV-7は、それぞれ、女子の場合と同じ質問で林の数量化III類によって得られた男子生徒の第1根と第2根である。男

子と女子では社会的立場、特に就職・採用の時の立場が異なる。また、職業観その他も異なる。したがって、本節の冒頭で比較したように、仕事や会社を選択する時、何を重視するかも異なる。しかしながら、何を重視するかは異なっても、表IV-6、表IV-7にあるように、基準そのものはほぼ同じものであつ

表IV-6 男子：第1根カテゴリー・ウェイト表

男 子	第1根	相関係数	・ 3859	数 値
1 今は小さいが将来性のある会社				-1.98
2 地域の名門企業				-1.10
3 大企業ではないが、努力しだいでどんどん出世できる会社				-1.07
4 小さいが自分の意見が生かされる会社				-1.00
5 給料は安いが高校で身につけた知識や技術を生かせる会社				-0.92
6 給料は安いが残業の少ない会社				-0.88
7 給料は安いがわりとおもしろい仕事				-0.85
8 自分で新しいことを考えていくことが大切な仕事				-0.72
9 小さいが人間味のある会社				-0.67
⋮				
中 略				
⋮				
28 1つの部門を専門的にまかせる会社				0.99
29 ちょっとやりがいに欠けるが、気楽にできる仕事				1.01
30 机に向かうことの多い仕事				1.35
31 安定性のある大きな会社				1.37
32 出世はしにくいが安定した大企業				1.56
33 高校で身につけた知識や技術を生かすことはできないが給料が高い会社				1.58
34 あまりおもしろくないが給料は高い会社				2.37
35 自分の意見はあまり生かされないが、大きな会社				3.29
36 人間味に欠けるが、大きくて有名な会社				3.72

↑ 内容志向的

↓ 外面志向的

た。そこで、本報告では、男子生徒の基準を女子生徒の基準と同じ名称、すなわち内容志向的と外面志向的、達成志向的と安定志向的と呼ぶことにする。

また、それぞれの基準によって作られた4つの判断の仕方のタイプも、図IV-9にあるように女子生徒と同じ名称をつけた。

さっそく、これら男子生徒の仕事・会社選択の基準や4つの選択のタイプを学科別・学年別などに見てみよう。

学科・学年と仕事・会社選択の基準

図IV-10は、学科別・学年別にサンプルスコアの平均点をとったものである。女子生徒の場合(図IV-6)よりも、学科間・学年間の

表IV-7 男子：第2根カテゴリーウェイト表

男 子	第2根	相関係数	• 2887	数 値
1 給料は安いが授業の少ない会社				2.43
2 一生勤めることのできる会社				1.82
3 毎月決まった給料をもらう仕事				1.79
4 言われたことをきちんとこなすことが大切な仕事				1.73
5 出世はしにくいが安定した大企業				1.38
6 給料は安いが、高校で身につけた知識や技術を生かすことができる会社				1.23
7 自分の興味と少しはずれるが、自宅通勤のできる会社				1.19
8 給料は安いがわりとおもしろい仕事				0.68
9 安定性のある大きな会社				0.65
⋮				
中 略				
⋮				
27 大卒社員の多い会社				-0.83
28 今は小さいが、将来性のある会社				-0.94
29 大企業ではないが、努力しだいでどんどん出世できる会社				-0.95
30 一人でこつこつする仕事				-1.02
31 給料や労働条件のよい会社				-1.22
32 自分で新しいことを考えていくことが大切な仕事				-1.30
33 人間味に欠けるが大きくて有名な会社				-1.33
34 あまりおもしろくないが給料は高い仕事				-1.84
35 出来高によって給料が上がっていく仕事				-2.07
36 高校で身につけた知識や技術を生かすことはできないが給料が高い会社				-2.16

↑
安
定
志
向
的

↓
達
成
志
向
的

差が小さい。ただ、女子生徒の場合もそうなのだが、すべての学科でわずかずつだが学年が上がるにつれ安定志向的になっていくのが目立つ。

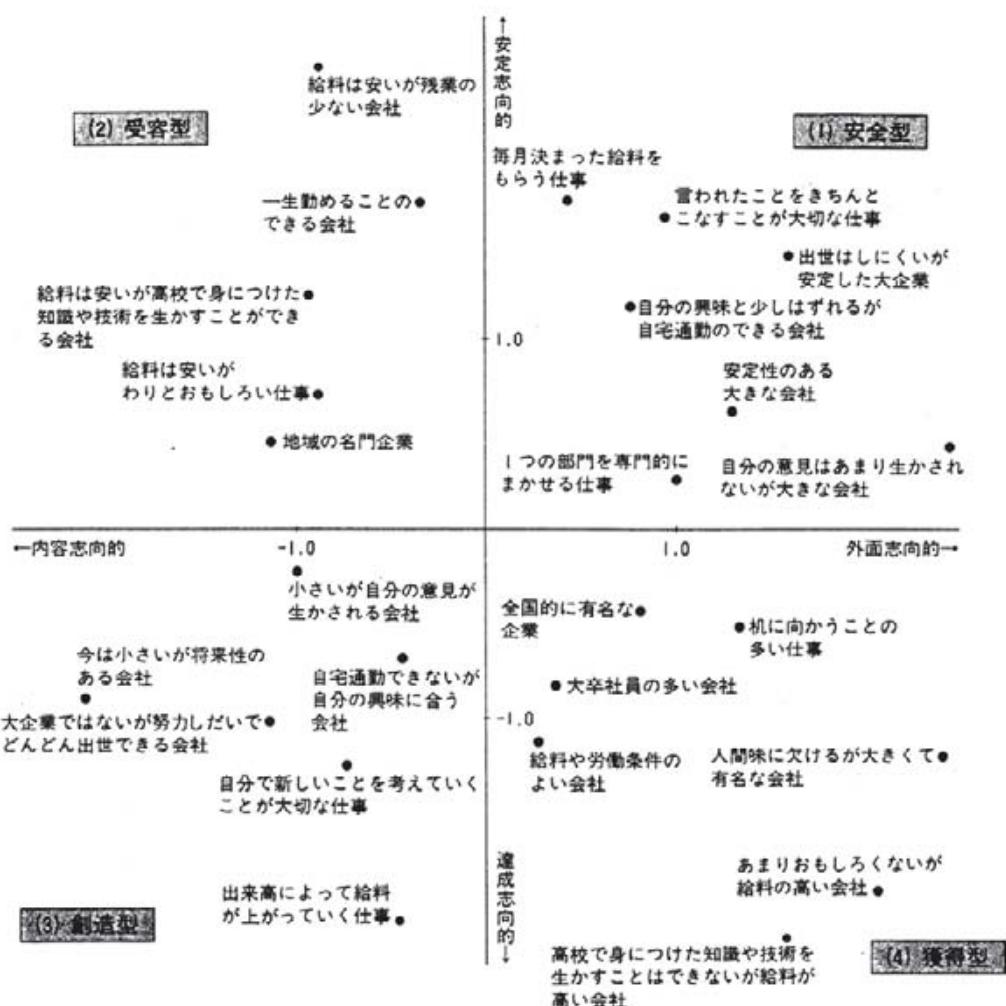
高校卒業後の進路、将来つきたい仕事と仕事・会社の選択

高校卒業後の進路別、将来つきたい仕事別

にサンプルスコアの平均点をとったものが図IV-11である。

まず、高校卒業後の進路と基準の連関について見ると、女子生徒の時(図IV-7)と同じく、就職・家の手伝いを希望する者は安全型の、また、各種学校・専修学校を希望する者は創造型のタイプに入っている。しかしな

図IV-9 男子：仕事・会社選択の4つのタイプ

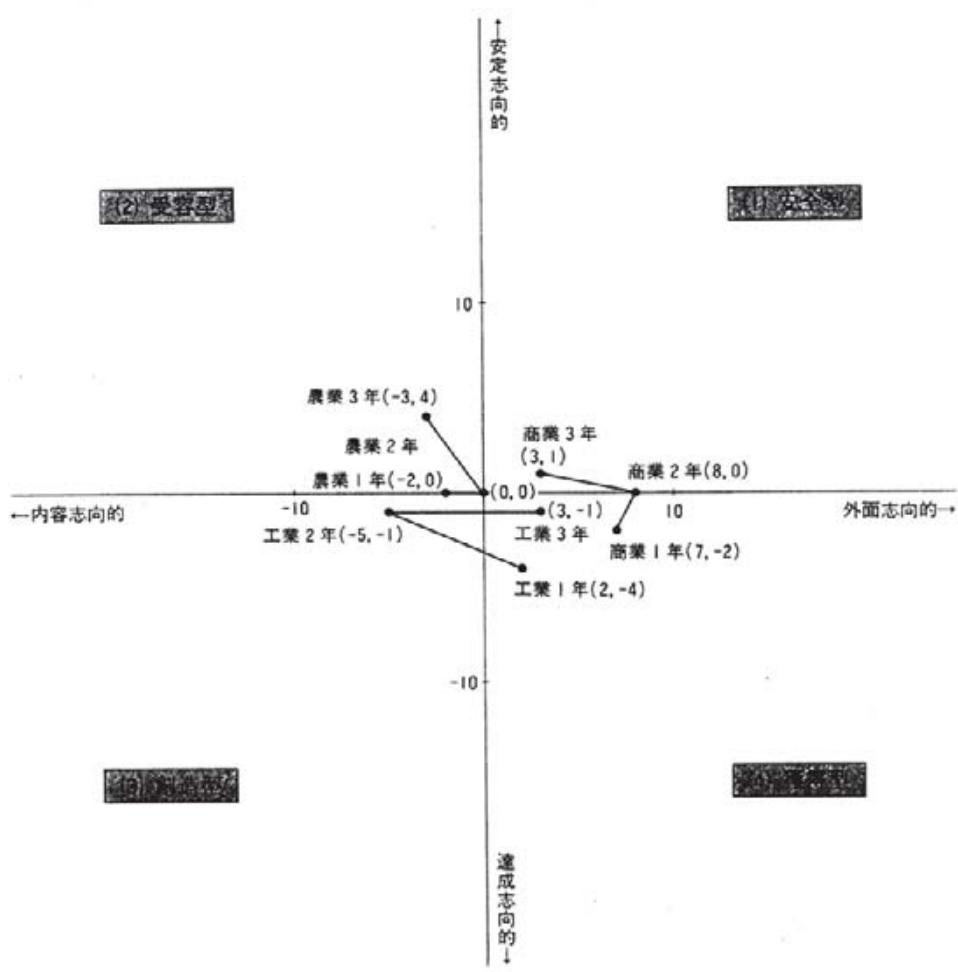


がら、その他・未定と回答した者は創造型の中に入っているものの外面志向的、安定志向的な方向に動いており、大学を希望する者に至っては獲得型の中に入っている。この結果からすると、男子生徒の場合、女子生徒と比べて、大学はより外面的で、より安定的な職業生活へのルートと考えられているのであろ

うか。

次に、同じ図で将来つきたい仕事との連関を見てみよう。安全型から見ると、ここには、大企業の事務職、大企業の技能工・工員、専門・管理、中小企業の事務職の4つが含まれている。男子生徒の目には、これら一般に一流と言われ人気のある仕事は、働いてさえい

図IV-10 男子：学科別・学年別サンプルスコア平均点



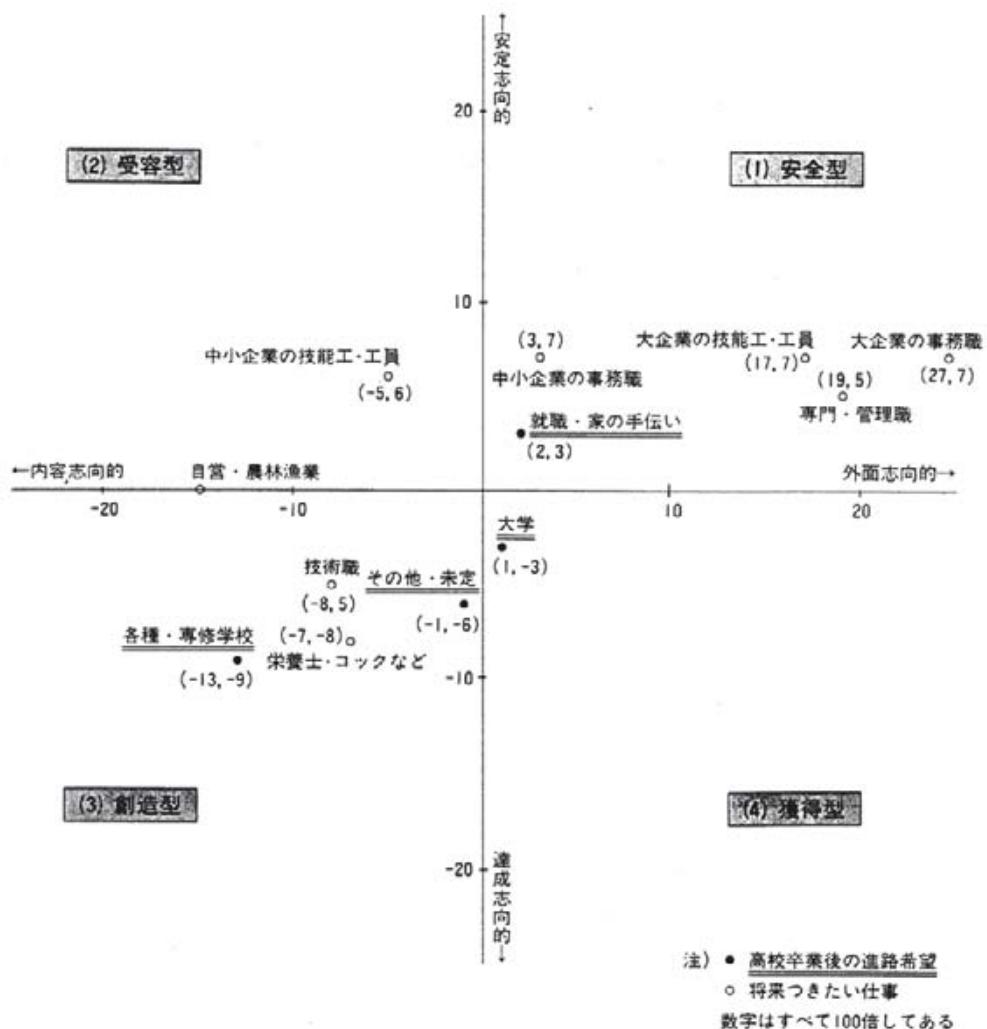
れば外面向的なものを、そこそこは保証してくれる仕事と映るのであろう。女子の場合(図IV-7)、完全にここに入っている仕事がなかったことと対照的である。

その他の仕事では、中小企業の技能工・工具が受容型に入り、技術職と栄養士・コックなどの2つが創造型に入る。また、自営・農

林漁業は、受容型と創造型の中間にある。
職業についての自信と仕事・会社の選択の基準

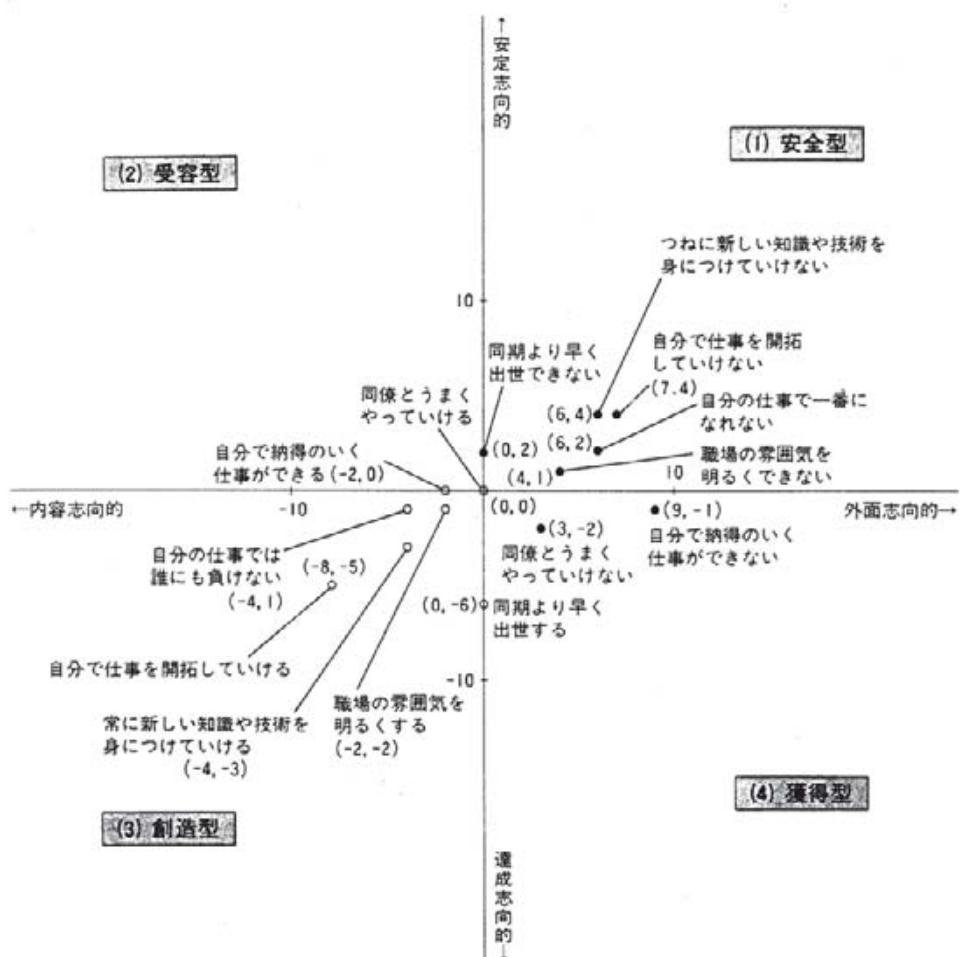
最後に図IV-12で、職業生活についての自信と、仕事・会社選択の基準の連関を見てみよう。全体として、女子生徒(図IV-8)と同じく自信があると答えた生徒が、内容志向的で

図IV-11 男子：進路希望別、将来つきたい仕事別サンプルスコア平均点



達成志向的、すなわち創造型であり、自信がないと答えた生徒が、外面志向的で安定志向的、すなわち安全型であることがわかる。男子生徒の場合も職業生活に対して自信が持てるような諸々の指導が望まれよう。

図IV-12 男子：職業についての自信別サンプルスコア平均点



3. 職業生活への期待と不安

(1) 初任給の予測と使いみち

就職による親からの自立という事実をもつとも象徴的に表すのは、月給を得ることに違いない。高校生自身にとっても、自分で働いてお金を稼ぐことは、子どもからおとなへ、受動的な生徒から能動的な青年へ、被扶養者から独立した成人へという、期待に満ちた変身を連想させるものであろう。

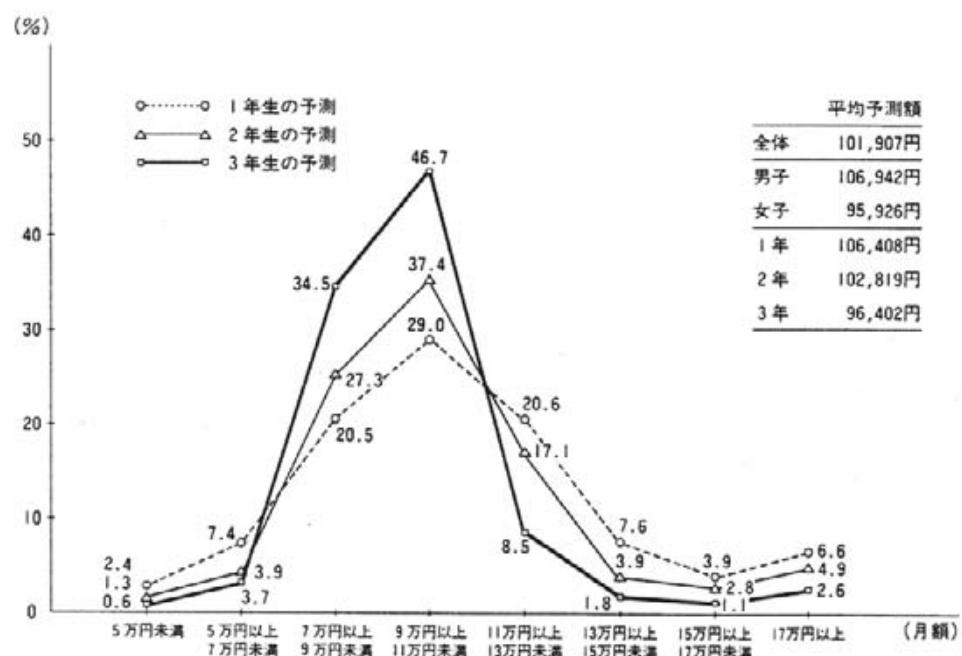
図IV-13は、高校卒業後の初任給（月額、手どり）を予測させたものである。平均予測額は全体で、101,907円で、性別に見ると男子・106,942円、女子・95,926円と、男子のほうが1万円余高い月給を予測している。

ちなみに、全国統計によれば、高卒初任給の平均月額は、表IV-8のようになっている

（資料出典は、表下を参照のこと）。この数値は、超過勤務手当などを含んでいないため厳密に比較することは難しいが、参考のため比べてみると、われわれが調査した職業科高校生のうち、女子は概ね実際の給与額を言い当てており、男子は約1万円、実際よりも多めに月収を見込んでいることになる。

だが、この比較は全体の平均値だけに着目したものであって、初任給の予測額の分布を見ると、少なからぬ高校生が月給の額について現実にはありそうもない予測をしているのは明らかである。つまり、同統計によれば、実際の初任給（高卒）は、事務職で64%、技術職で82%と大半が9万円から11万円の間に集中しているのに対して、職業科高校生で9万円から11万円の月収を予測しているのは38%

図IV-13 高校卒業後の初任給（月額）の予測



にすぎない。

図IV-13に戻って、初任給予測額の学年別分布に注目してみると、学年の上昇とともに、高月収を予測する者が減り、かつ、9~11万円の間に予測額が集中するようになっている。高校生の予測が学年の上昇とともに、実際の平均初任給とその分布に、きわめて近いものになっていくのである。少なくとも月給面で見る限りにおいては、職業科に学ぶ高校3年生の目は、就職後の生活をほぼ的確に見ぬいていると言つてよいだろう。

では、その月給を彼らはどのように使うつもりなのだろうか。自分の生活費や小遣い、親の家計を助ける、貯金するという3つの使途について、月給のどのくらいをそれぞれにあてるつもりなのかを尋ねた結果が、図IV-14である。

月給の一般的な使い方のパターンが、かなりはっきりと出ている。もっとも代表的な月給の使い方は、自分の生活費や小遣いに半分、貯金に4分の1、親の家計を助けるのに4分の1である。この使い方のパターンは、グラフ

表IV-8 高校初任給月額の実際

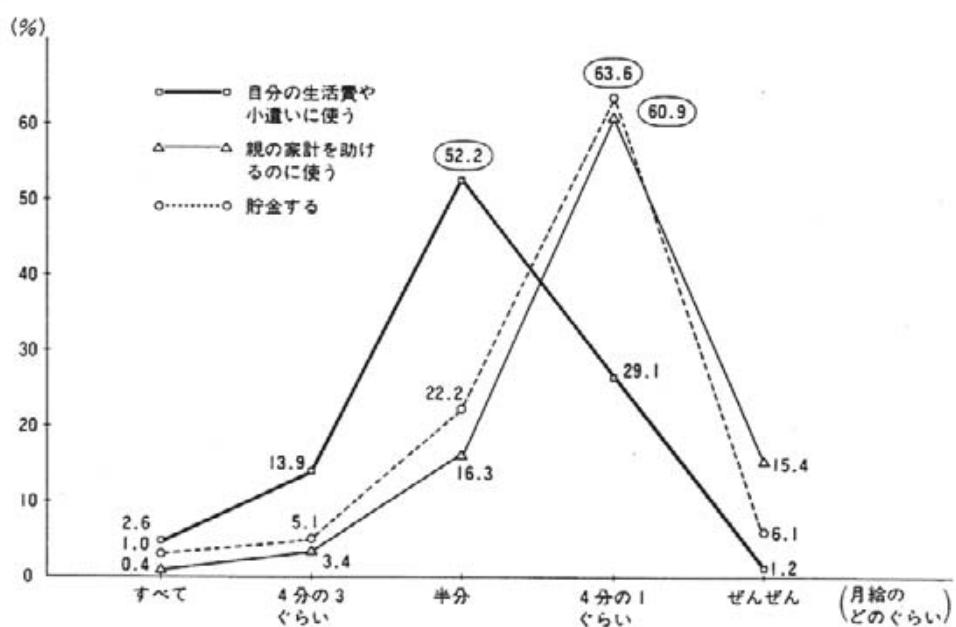
(円)

	計	男子	女子
事務員	92,773	95,020	92,329
技術者	96,286	96,371	95,019

注) 初任給月額には超過勤務手当、扶養手当などは含まれない。

(資料出所: 人事院給与局編「民間給与の実態—昭和56年職種別民間給与実態調査の結果—」)

図IV-14 月給の使いみち



の山のとんがり具合、つまり回答の集中度から考えて、職業科高校生の間できわめて一般性の高いバタンであることが推測できる。

自分で働いてお金を稼ぐこと、それは、就職予定者が大半を占める職業科高校生にとって、自立や自由の獲得を象徴的に表すものであるはずである。その月給を、彼らは生活費と小遣いに半分、貯金と親の家計を助けるために4分の1ずつ使おうと計画している。自分の小遣いと生活費だけに月給の4分の3以上をあてたいと考える者は15%ほどにすぎない。まことに堅実で、心やさしい職業科高校生像が、顔をのぞかせているというほかはない。

(2) 就職した後の生活の予測

ではいったい、彼らは職業生活に何を期待し、どのような不安を持っているのだろうか。

私たちは、職業科に学ぶ高校生が、就職したあとの生活をどのように予測しているかについて質問することによって、彼らの抱いている職業生活への期待と不安の気持ちを明らかにしようと考えた。

表IV-9は、「仮に、高校卒業後就職をし

たとして」という仮定を設け、いくつかの項目について就職した後の生活はどのようになると思うかを尋ねた結果である。

まず、職業生活への期待の側面を尋ねた3項目(表上3つ)について見ると、「まわりの人にはおとなとして扱ってくれる」約7割、「毎日はりあいのある生活ができる」55%と、過半数の者が、子どもからおとなへの脱皮、学校生活以上にはりあいのある生活を、職業人としての生活に期待していることがわかる。小・中・高校とつづいた、「子ども」や「生徒」としての存在を終え、成熟した「おとな」への旅立ちを、就職に期待しているのである。

これら3項目に比べると、「自由に使えるお金が増えて楽しいだろう」という経済的な自由への期待はやや小さい。これは、前項で触れた、月給の予測やその使いみちの計画とかかわっているものと解釈できる。

「おとなとして扱われること」「今以上にはりあいのある生活」が期待される職業生活であるが、そこには大きな不安もある。確かに、「同じ会社に何年勤められるかわからない」「そのうち仕事にあきてしまうかもしれない」と答える者は、いずれも約4割と、他の項目

表IV-9 就職後の生活の予測

	全体	男子	女子	1年	2年	3年	(%)
まわりの人は「おとな」として扱ってくれるだろう	68.5	67.1	70.0	69.5	68.6	67.2	
毎日、はりあいのある生活ができるだろう	54.8	56.1	53.2	60.6	> 51.1	52.5	
自由に使えるお金が増えて楽しいだろう	47.3	40.4	< 55.2	51.7	> 45.9	44.2	
一人前に仕事ができるか不安だ	74.0	67.2	< 81.7	72.2	74.7	75.1	
職場で上の人にや同僚に気を遣って大変だろう	73.2	64.9	< 82.6	68.7	< 73.1	< 77.7	
仕事に追いまくられて忙しくなるだろう	71.9	71.5	72.4	68.5	< 72.2	< 75.0	
同じ会社に何年勤められるかわからない	42.0	39.2	< 45.4	36.5	< 42.3	< 47.5	
そのうち仕事にあきてしまうかもしれない	41.8	39.5	< 44.5	36.3	< 46.0	43.4	

注) とても まあ あまり ぜんぜん
 そういう そういう そういう そういう
 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
 ↓
 0.4

と比べてそれほど多くはない。職業継続、勤続についての不安は相対的には小さいのである。しかし、「一人前に仕事をする」、「職場での人間関係をうまくやる」など、単に仕事をつづけるだけではなくそれ以上のことになると、7割を超える者が不安を訴えている。この7割という数字は、「おとなとして扱われること」「毎日はりあいのある生活」への期待よりも大きい。つまり、職業生活への不安

は、期待を上回っているのである。

こうした職業生活に対する不安は、男子よりも女子で、また、学年の上界にともない就職が間近になるにつれて大きくなっている。

職業科に学ぶ高校生は、学校生活を終え就職することに対して、自立や成熟への期待を抱いている。その反面、経験したことのない未知の実社会、職業生活への不安を感じながら、就職していくのである。

4. 家庭生活の設計

(1) ライフサイクルの見通し

さて、最後に職業科に学ぶ高校生の描く将来の家庭生活について見てみよう。

はじめに、図IV-15から、彼らのライフサイクルの見通しについて見てみると、「親から独立して一人で暮らすのは何歳頃からか」の質問に対して、「そうはならない」とする者は男子が16%、女子が18%である。その他の生徒は、独立して一人で暮らしたいと思っている。そして、男女ともに6割の者が、22歳までに独立したいとしている。

次に、「何歳ぐらいで結婚したい」と思っているかについて見ると、男女ともに25歳までに結婚したいと思う者が半数を超え、特に女子では84%になっている。職業科の生徒は、大卒の者と比べて早目の結婚を考えていると言えよう。とはいっても、25歳と言えば高校卒業後すぐ働き始めた生徒にとって、すでに就職後7年を経過していることになる。したがって社会人としての年齢をみるとならば、決して早いとは言えないであろう。

次に彼らが何歳ぐらいで子どもを持つと思っているのか見てみよう。22歳までに持つと

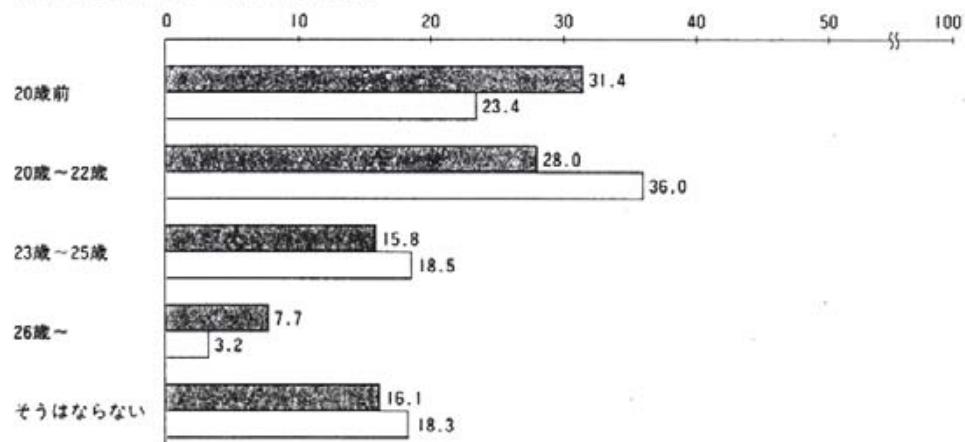
する者は男子で8%、女子で13%でしかない。しかしながら、25歳までは男子が35%、女子が59%、さらに28歳までは男子が75%、女子が86%と、23歳から28歳までの間で急速に増え、28歳の時には男女とも大半の者が子どもを持ちたいとしている。



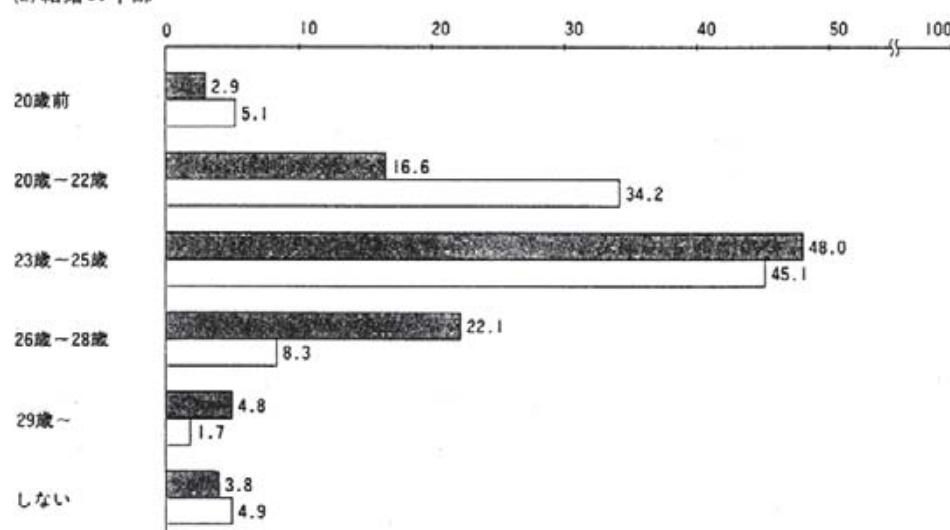
図VI-15 ライフサイクルの設計

(%)

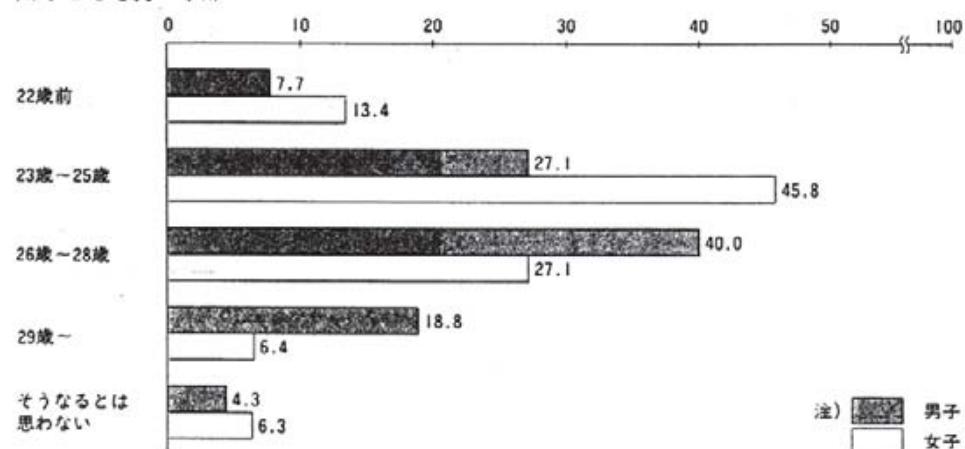
(1) 親から独立して一人で暮らす年齢



(2) 結婚の年齢



(3) 子どもを持つ年齢



(2)家庭生活の設計

以上、職業科の高校生のライフサイクルの見通しについて見てきた。それでは、以上のようないい見通しの上に、彼らがどのような家庭生活を考えているのか、この問題について見てみよう。

表IV-10は、男女別に「どんな家庭生活をしたいと思うか」を回答者の多い順にまとめたものである。男女ともに「一か月に一度は夫婦で外食したい」(男子84%、女子91%)、「お弁当を毎日作ってもらいたい(作りたい)」(男子83%、女子86%)と仲むつまじい生活をし

たいと考えている。そしてまた、若いうちはできるだけ貯金をしたい(男子82%、女子91%)と経済的にもしっかりとしている。ところが「妻が熱を出したら夫は会社を休みたい(休んでほしい)」(男子53%、女子34%)と職業生活と家庭生活とに葛藤が起きた時には、少々甘い選択をしそうである。

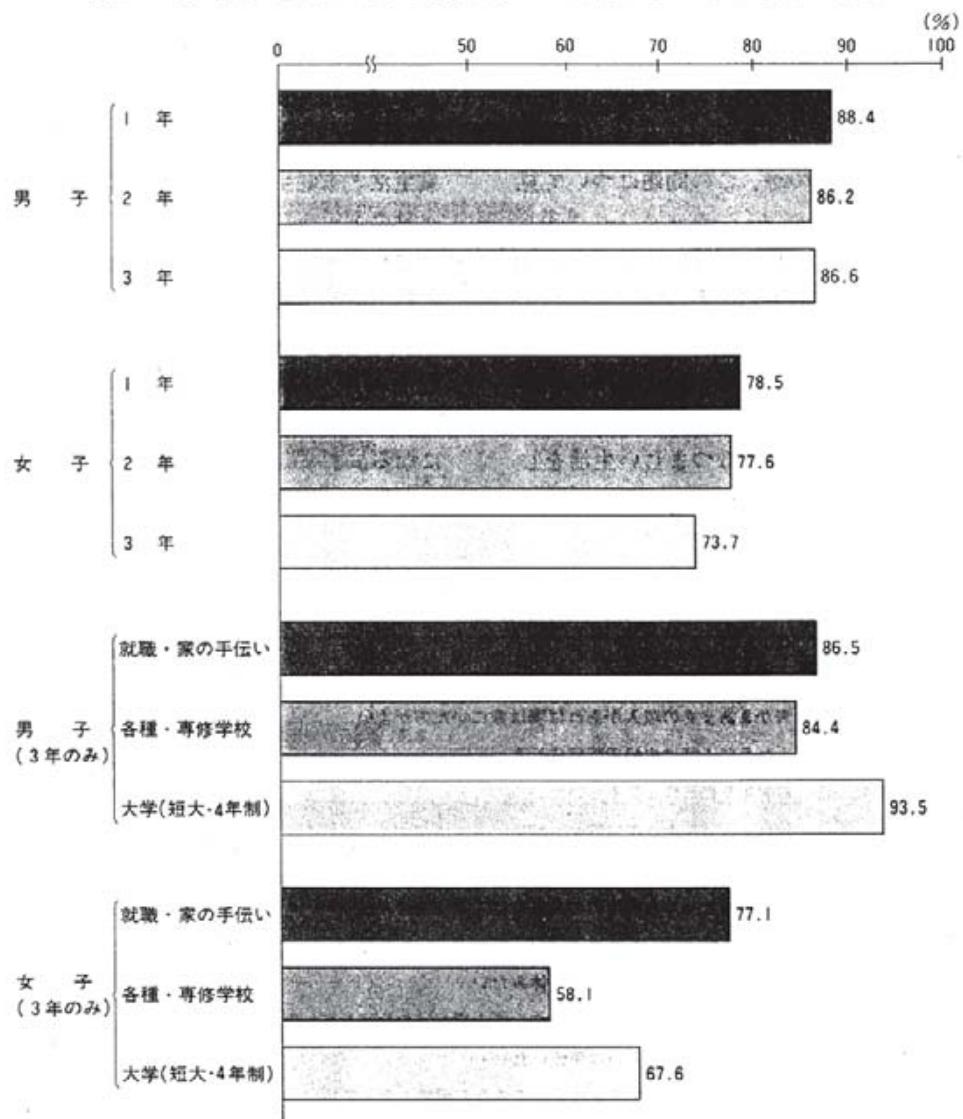
また「夫にまあまあの収入があれば妻は家にいた方がよい」は、男子が87%、女子が77%と、ともに高い割合になっているが、男子の方が10%ほど高い。この質問について、もう少し詳しく見てみると、図IV-16のようになる。まず、性別・学年別に見ると男子で

表IV-10 家庭生活の設計

(%)

〈男・子〉	
① 夫がまあまあの収入があれば妻は家にいた方がよい	87.2
② 1か月に1度は夫婦で外食に行きたい	84.2
③ お弁当を毎日作ってもらいたい	83.4
④ 若いうちはできるだけ貯金したい	81.8
⑤ 若いうちはできたら親とは別々に暮らしたい	72.8
⑥ 親が年をとったら老後のめんどうはできるだけみたい	72.1
⑦ 妻とたまにはペアルックで外出したい	58.0
⑧ 妻が熱を出したら夫は会社を休みたい	53.0
⑨ 結婚して3~4年は子どもは作らず夫婦だけの生活を楽しみたい	33.3
⑩ 夕食後の片づけぐらいは手伝いたい	31.0
⑪ 妻よりも、もっとすてきな人ができたら離婚も考えていい	10.5
〈女・子〉	
① 若いうちはできるだけ貯金をしたい	90.6
② 1か月に1度は夫婦で外食に行きたい	90.5
③ 親が年をといたら老後のめんどうはできるだけみたい	88.5
④ お弁当を毎日作ってあげたい	86.2
⑤ 夫がまあまあの収入があれば妻は家にいた方がよい	76.7
⑥ 若いうちはできたら親とは別々に暮らしたい	74.1
⑦ 夫とたまにはペアルックで外出したい	60.9
⑧ 夕食後の片づけは手伝ってほしい	40.1
⑨ 妻が熱を出したら夫は会社を休んでほしい	34.3
⑩ 結婚して3~4年は子どもを作らず夫婦だけの生活を楽しみたい	33.8
⑪ 夫よりも、もっとすてきな人ができたら離婚も考えていい	11.7

図IV-16 夫に収入があれば妻は家にいた方がよいと思う者の割合



は、1年生が88%、2年生が86%、3年生が87%と、「妻は家にいた方がよい」とする生徒の割合は、学年ごとにほとんど差がない。しかしながら、女子では、1年生が79%、2年生が78%、3年生が74%と学年が上がるにつれ「夫にまあまあの収入があれば妻は家にいた方がよい」とする生徒の割合は減っていく。すなわち、女子では学年が上がるにつれて、仕事を収入の手段以外のものとみるようになっていくのである。

つづいて、性別・進路志望別に見ると（ただし、ここでは進路が現実味をおびてきた3

年生だけを対象とした）、まず、男子では意外にも、大学に進みたいと考えている生徒に「妻は家にいた方がよい」とする伝統的な考えをする者が多い(94%)。さらに女子について見ると、「妻は家にいた方がよい」とする者は高校卒業後すぐ就職(または家を手伝う)を予定している者がもっと多く77%、次は大学に進学を予定している者で68%、そして各種学校・専修学校を予定している者よりも少なく58%となっている。この数字は、本章第2節の仕事や会社の選択の基準についての分析で、各種学校・専修学校がもっとも内容

志向的な基準で選択し、つづいて大学、最後に就職・家の手伝いとしたいに外向志向的に選択しようとしたことと関係しよう。すなわち、各種学校・専修学校に進学しようとする生徒は、仕事を単に収入のための手段であるとは考えず、それ以上のもの、自分を表現するものと考えているのである。したがって、「夫にまあまあの収入」があっても仕事をやめようとは思わないのである。

職業科の高校生の描く将来の家庭生活をま

とめると、結婚や子どもはやや早めに、新婚生活は仲むつまじくという生活設計が浮かび上がってくる。しかしながら、男子は妻を家庭に置いておこうとするのに対して、女子(特に進学を希望する女子)は必ずしも家にいることを望んではいない。妻が働きに出るかどうかという問題をめぐって、「女の自立」が夫婦の争いの焦点となる可能性もあるが、職業科の高校生は、一般にハッピーな家庭生活を築こうとしていると言えよう。

本章では、職業科に学ぶ高校生の将来設計をいくつかの角度から探ってきた。全体として、職業科に学ぶ高校生の描く将来生活は、現実的な色あいが強く見られた。

彼らが、高校卒業後、実社会へ出てからの生活に期待しているのは、職業的な成功や職場での地位達成というよりは、一人前のおとなとしての生活である。受動的、従属的な"子ども"や"生徒"ではなく、"おとな"として自由に生活すること、言い換れば、"成熟"への願望や期待を持って、彼らは実社会へと入っていく。

だが、そうした期待の背後には、一人前に仕事をし、職場での人間関係をうまくやっていけるかどうか、自信の持てない大きな不安が同居している。家庭や学校というひ護された世界から未知の実社会へと入っていく青年にとって、こうした不安は当然のものであるかもしれない。しかし、職業科高校は、生徒の不安が彼らの将来生活の中で現実のものとならぬよう、職業的能力や実社会での生活能力を与えるという課題を負わされている。この課題は、卒業後すぐに実社会へと出していく青年をかかえ、また職業専門教育を主な機能とする職業科高校にあっては、とりわけ重要である。単に生徒を学校に適応させるという視点からだけではなく、その将来の職業生活や社会生活における効果をも考慮した視点から、今日の職業科高校における教育のあり方を考えていく必要があろう。

おわりに●

この報告書は、「モノグラフ・高校生」シリーズの中で、はじめて「職業科に学ぶ高校生」を扱ったものである。

「モノグラフ・高校生」シリーズに限らず、職業科に学ぶ高校生に主たる焦点をあてて、彼らの意識と生活を描こうとした実態調査は意外に少ない。おびただしい量のデータが描き、そして私たちが作りあげてきた現代高校生像の主役は、普通科に学ぶ高校生——なかんずく、進学を志す高校生であった。たとえ、職業科高校やその生徒が登場することはあっても、彼らは脇役であり、職業専門教育を行っている教育機関として正当に位置づけようとする姿勢は弱かった。常に主流は“普通科一進学”であり、“職業科一就職”は傍系であった。

それだけではない。職業科に学ぶ高校生に対して貼られているレッテルには、否定的ニュアンスを含んだものがあまりにも多い。“落ちこぼれ”“不本意進学”“問題行動”等々、職業科高校が語られる時には、こうしたレッテルが必ずしもといってよいほどついてまわる。職業科高校には中学校での厳格な“輪切り選抜”によって、学力の低い層の生徒だけが集まってくるという根強い“常識”や数少ない極端な問題事例が、このようなレッテルを割り出し、多くの職業科高校とその生徒を包みこんでいる。端的に言って、彼らに与えられた形容詞は、進学競争や学歴取得競争の“敗者”であった。

私たちが意図したのは、職業科に学ぶ高校生の過去・現在の体験や将来の夢を、彼らにつきまとう“レッテル”から離れて見つめ直すことであった。職業教育を行い、生徒を実社会へと旅だせる役割を正しく評価し、この観点から職業科に学ぶ高校生のおかれた状況や意識・生活をありのままに浮かび上がらせることを考えたのである。

調査結果をふり返ってみて、まず第1に受けるのは、受験競争の敗者としての暗い印象ではない。確かに、職業科に学ぶ高校生の大部分は中学校時代に成績がとびぬけて上位だったわけではない。学業の面では多少の劣等感を持つ者が多いかもしれない。しかし、彼らの中学校時代は、必ずしも暗いイメージだけで彩られているわけではない。今回の調査対象校の特質にもよるのであるが、大多数が中学校時代にクラスメートや教師と良好な関係を持ち、約半数の者が仲間の先頭に立って活動するリーダー経験を持っていたのである。この意味で、職業科に学ぶ高校生の過去を、損傷体験に満ちた生活として決めつけてしまうわけにはいかない。

現在の学校生活にしてもしかりである。大多数が不本意に在学し、授業についていけず、学校不適応に陥っているというデータは出でていない。普通科に行っていたら、もっとハリのある生活ができるだろうと、職業科進学を悔いている生徒も数少ない。

しかし、こうしたデータの中に、同時に、

職業科高校のかかえる問題点を感じさせるデータも少なくない。職業科高校の特色である専門科目の授業に対して、生徒は大きな興味を持ち、役に立つと信じている。職業資格取得のための勉強にやる気を持つ生徒も相当数いる。だが、どんな生徒が高校に入って生活が楽しくなかったかを考えてみると、手ばなしで職業科で行われている教育の効果を認められるわけにはいかない。高校に入って学校生活が“好転”するのは、職業科高校に第1志望で入学し、高校選択に際し「自分の向き、不向き」を重視し、しかも、専門科目の勉強に強い動機づけを持った生徒たちである。言い換えるれば、適性や動機づけにおいて職業科教育にマッチした者たちである。当然のことながら、現行の制度下では、職業科高校への入学者を、適性や志望のマッチした生徒だけに限ることは、ほとんど不可能である。今回のサンプルでも、第1志望で現在の高校に入学した者は約4割であり、残りの半数以上は、学力の点で仕方なく志望を変え、あるいはさしたる目的もなく入学している。今のところ、職業教育にそれほど動機づけを持ってない生徒たちの学校生活への適応を可能にしているのは、職業科高校が提供する教育ではなく、気の合った仲間の存在や、おとなとしての成熟願望に基づかれた将来生活への夢であろう。ここに、職業科高校のかかえる大きな問題点が見えている。

こと志に反して、私たちの報告の中には、



意を尽くせなかった点や、分析に深まりを欠いている点が少なくない。もともと、明らかではない現実の側面にメスを入れるのが社会調査のねらいであるが、正直言って“土地勘”のない私たちは困難をきわめた。私たちの経験などにより、的はずれな解釈や、ごくあたりまえの記述が多いのではないかと危惧している。特に職業科高校自体も性格を異にするいくつかのタイプに分化していることや、就職・職業生活における専門教育の効用など、重要な論点が軽視されていることも否定できないが、職業科高校研究の礎石として、ご理解、ご利用いただければ幸いである。